

反り橋、そんな反り橋、渡らぬものか、こきりこきり五左衛門は、何處で打たれた、鹿島<sup>かしまがじ</sup>街道の茶屋の小娘に打たれた、打たれたも、面目ないで、からすやぐらで、身を捨てた一ちようく

## 倫理管見

石井 國次

### 第四 不完全なる社會

さて次に考ふべき問題は然らば過去幾千年間の社會及現在に於ける社會は果して吾人の諸慾望を満足せしめしや否やといふとである。大哲釋迦は此世を假の世空蟬の世と教へ大聖基督は死後に天國あることを説かれた甚しきに至てはシヨツペンハウエルの如く此社會を苦痛の谷とまで罵れるもあつた之等の例を擧げたならなか／＼數へつくせぬが兎に角多くの人が此社會に滿

足すること能はざりしことは争ふべからざる事實である

けれどこれは人間に快樂よりも苦痛の方がより大なる、より永續する印象を興ふる性質のあるため勿論個人は過去にも現在にも亦恐らく未來永き間にも社會的生存に依て絶對的満足絶對的幸福を得ることは出来ぬけれど孤立的生存を爲すよりも比較的頗大なる満足を得たといふことは疑ない事實である

しかのみならず予は進んで遠き將來に於ては絶對的満足が社會に於て得らるゝに至らんことを斷言せんとするものである、予は社會が未人類に絶對的満足を與ふることを得ないのは其組織が不完全なる爲である若組織が益進歩發達して絶對的に完成するに於ては人類は絶對的に満足を得べきものであると考へる

### 第五 完全なる社會

然らば完全なる社會組織とは何であるかといへば社會が極めて緻密精細なる有機體となることである時代に

應じ人智の發達に従ひて社會といふものにも廣狹精疎のあるは勿論で或は部族が一社會たりし時或は民族が一社會たりし時のあつたことはいふ迄も無いが今日では國家といふものが一の社會をなして居るものであるそして此社會といふものは有機的組織をなして居るのである此事は二千餘年前希臘の大學者プラトンを始唱者とし近世にては獨逸のブルンチュリー、佛國のフーイエ英國のスペンサー等碩學泰斗の皆承認する所である、

けれども有機體にも其發達に於て種々なる階級があつて人間の如き緻密なるものもあればアミーバの様な疎雜なるものもあるので此現在の社會も即有機的社會ではあるけれども悲いかな未原始的有機體といふべきも

のであつて十分に發達せぬ謂はゆる發達の中途にあるものである

然らば完全なる有機體とは如何なるものかといふに之を組成する各細胞の間に分業と統一とが精密に行はれて利害關係極めて鋭敏となり全體の健全は直に各細胞の健全となり各細胞の痛痒は直に全體の痛痒となるといふ様にならねばならぬ下等動物の様に全身を二つに切斷しても各部は別々に生存し一部の苦痛は全體に左程關係が無いといふ様な感覺の鈍き不完全組織ではいかぬそこで社會も亦完全の有機體となるには第一に分業といふことが十分に發達して來ねばならぬとして各員は皆其社會に有用なる材となり社會の利害と個人の利害と全然一致するに至り第二には其各細胞間を連絡し統一する神經系統といふべき道路鐵道電信印刷等が驚くべき發達をなして相互利害の關係を鋭敏にし從て

社會的制裁極めて強くなり第三には分業の進歩に伴ひて社會の血液ともいふべき物質的供給豊富となるといふ様にならねばならぬ社會の發達こゝに至れば社會に無用の材なく弱肉強食の悲惨なく吾人のあらゆる慾望は満足せられて謂はゆる天國を現出したものである、社會の安寧幸福と個人の安寧幸福とは全然一致し個人は始めて絶對的に満足を得るものである、(但此天國は國家分立の今日に於ては其現出を望むべからず何となればたとひ國家内に於ては如何に精緻なる有機的組織を爲して争鬭なしとも國家間の争鬭は絶へざるべければなり故に予の説は結局世界一家説となるなり他日特に論究するところあるべし)

第六 人生の目的と倫理の善惡

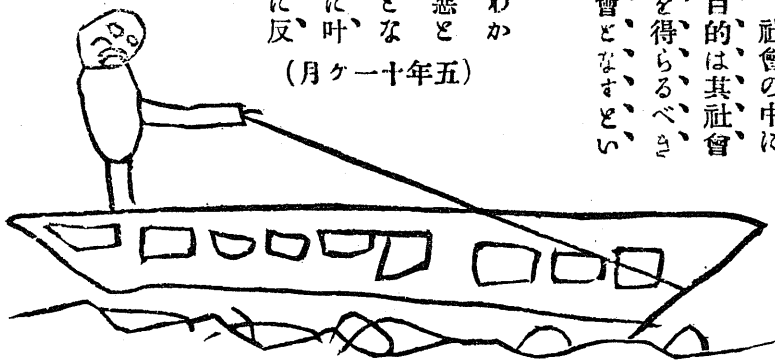
そこで自然に快を求め不快を避くるところの人類の窮竟の目的如何といへば此圓滿完全なる天國を現出する

といふことなのである、社會の中にのみ生存すべき人類の目的は其社會を彼等が絶對的に満足を得らるべき緻密精細なる有機的社會となすといふことである

既に人生窮極の目的がわかつた以上は倫理上の善惡といふことも極めて明瞭となつた即社會の發達進歩に叶ふ行爲は善であつて之に反するものは惡である

(月一十年五)

所がこゝに注意せねばならぬのは成程完全なる有機體とならば全體の安



寧幸福と之を組成する細胞との安寧幸福とは全然一致するものであるが完全なる有機體にはなかく、そうはいかぬ時としては全體と其若干細胞との間に一致したいことがある、そういう場合には已むを得ず若干細胞を犠牲にして全體の健全を計らねばならぬとく此不完全なる有機的社會に於ても往々にして社會と個人との安寧幸福に衝突があるものであつて此場合には無論個人の方は犠牲に供しても人類窮極の目的たる社會の進歩發達を計らねばならぬ

そこで吾人の先天的に有する諸慾望をれ自身には高下の別はない感覺上の慾望も精神上の慾望も皆それ／＼十分に發達せしむべきもの満足せしむべきものであるけれども社會といふ標準の上からいふて即社會の安寧幸福社會の進歩發達といふことの範圍に於て諸慾望にそれ／＼の制限をせねばならぬ又諸種の慾望が同時に

起りて相制剋する場合には同情とか公共心とかいふ如き社會的慾望は最高等最大切なるものであつてそれは平生から此高等なる慾望の十分なる養成につきて注意して居らねばならぬ要するに慾望の度に對する制限と位置に對する高下とは人生窮極の目的たる社會の發達進歩といふ標準よりして生ずるものである

## 第七 結論

以上私が申述べましたる大體をくりかへして申しますれば人には肉慾もあれば理性もある專自分の爲に計らんとする慾もあれば他人の爲に計らんとする慾もある之等は皆人類に必用なる慾であつて之等を甚しく抑へつけたり又は之等から解脱するなぞいふことは本當の倫理とはいはれぬ眞の道德は之等を益發達させて人生窮極の目的たる社會の進歩發達を計ることである肉慾や自分の爲に計る慾が無くなれば人類の繁殖も望ま

れず社會の進歩も願はれぬ之からの道徳は何でも消極的でなくて積極的でなければならぬ

然らば其社會の發達進歩といふことは何故に吾人の窮極の目的であるといへば社會が分業交通殖産等の驚くべき進歩によりて精巧なる有機的社會となるに於ては社會と個人との利害が一致して生存競争の軋轢も弱肉強食の悲惨もなくなりて謂はゆる吾人に絶對的満足と與ふべき天國となるべき筈であるからである

鶴 (三年十一月)



個人は社會の犠牲にならねばならぬ之が社會の進歩の

であるによつてそうはいかぬ、のみならず社會と個人との利害の衝突することがあるといふときは

爲であるから仕方がないそこで人類は未來此天國に達するまでは何事も社會の爲國家の爲といふことを主にして公德を第一の慾望とせねばならぬ (終)

圖書教授に付きて

東 基 吉

小學校に學ぶこと前後八年にして卒業し、普通の讀算術もでき、手紙の往復も可なり出来る者に向つて、何か畫いて見よと云ふ時は、まづ頭を搔いて、とても出来ぬといふ。進んで高等女學校を五年かゝつて卒業せる者に向つていふ時も亦同じ。中學校を卒業せる者に見るも亦然り。否々高等女學校を出で、更に高等の學校に遊べること四五十年の人々に問ふも、尙且然らざるなし。

圖書を學ぶこと、前後十七年、他の學科は皆一通の